

経済と経営 28-4 (1998. 3)

〈論 文〉

## 創造科学大学院プログラム

### 州認可取り消し事件

—— カリフォルニア州教育局 vs 創造研究所、1988-92 ——

うのうら  
鵜 浦 ひろし  
裕

### 1 はじめに

アメリカの「創造 vs 進化」論争がはじめてクローズアップされたのは 1920 年代半ばである。そのとき、生物学の授業中にヒトの進化に触れ当時の反進化論州法に違反したなどで、テネシー州デイトンの公立高校「教員」ジョン・T・スコープスが「有罪判決」を受けた。こうして始まった「創造 vs 進化」論争はその後も各地の教育現場で何度も表面化し、いくつかは大きな裁判にもなっている。アメリカの公教育にとってこの論争は一種の慢性疾患のようなものである。そのため、1987 年連邦最高裁判所は公立学校の科学授業における創造論唱道に違憲判決を出すことで、決着をつけようとした。司法の動きに合わせて、科学界も創造論批判を大々的に展開した。しかし 90 年代に入っても、この判決や科学界の権威を無視するかのような事件が各地でつぎつぎと「フレアー・アップ」するというのがアメリカの現状である。

私はすでにこうした事件を『札幌大学総合論叢』(札幌大学紀要) や『比較文化論叢』(札幌大学文化学部紀要) に書き留めてきた。たとえば、サンフラ

ンシスコ州立大学の生物学の正教授が、生物学の授業中に宗教的信条を科学として「教えた」ために、その担当コースからはずされるという事件をまとめた。この処分をめぐり同大学の静かなキャンパスは二分され、全国ネットで報道されるにおよび、大きな訴訟にまで発展するのではないかと思われた。学問の自由と学問水準の維持という二つの主張のぶつかりあいとして展開されたこの事件を、大学当局は結局裁ききれずに問題をあとに残してしまった<sup>1)</sup>。

また「創造 vs 進化」論争がアメリカの小さな町でどのような形をとるかを描いてみた。サンディエゴ・カウンティの東のヴィスタ統合学校区で起きた対立は、前論のような専門家どうしの争いではなく、普通のアメリカ人どうしの、いわば草の根レベルの「創造 vs 進化」論争だった。学校区というひとつのコミュニティーに位置づけたとき、論争は創造論教育の問題に縛られることなく、性教育や移民の子弟教育などの問題も連動して絡んでくる。しかも単なる教育問題としてローカルな展開にとどまることなく、民主党 vs 共和党の全国的な対立に直結し、中央からの部外者を巻き込んでいわば代理戦争の様相までおびてくる。結局、教員組合が組織力で創造論者を一方的に排斥するという形で終わったこの論争でも、根本的な問題の解決はみられなかつた<sup>2)</sup>。

さて、本稿はカリフォルニア州の教育行政が大学院教育をおこなう小さな私立学校を廃校に追い込もうとした事件についてリポートする。この私立学校は、いうまでもなく、創造論教育を行っているが、その卒業生にたいし自然科学の修士号を出しているため、州教育行政は「科学と称して宗教教育をおこなう」のは不適切であると判断し、州認可を取り消すことでそれを阻止しようとした。ところが、追いつめられたその私立学校は訴訟をおこした。裁判では、州が敗訴し手痛い返り討ちにあった。この事件を州教育行政レベルで生じる「創造 vs 進化」論争として位置づけて描いてみたい。

この事件には後日談がある。州敗訴のあと、創造論側が追い打ちをかける

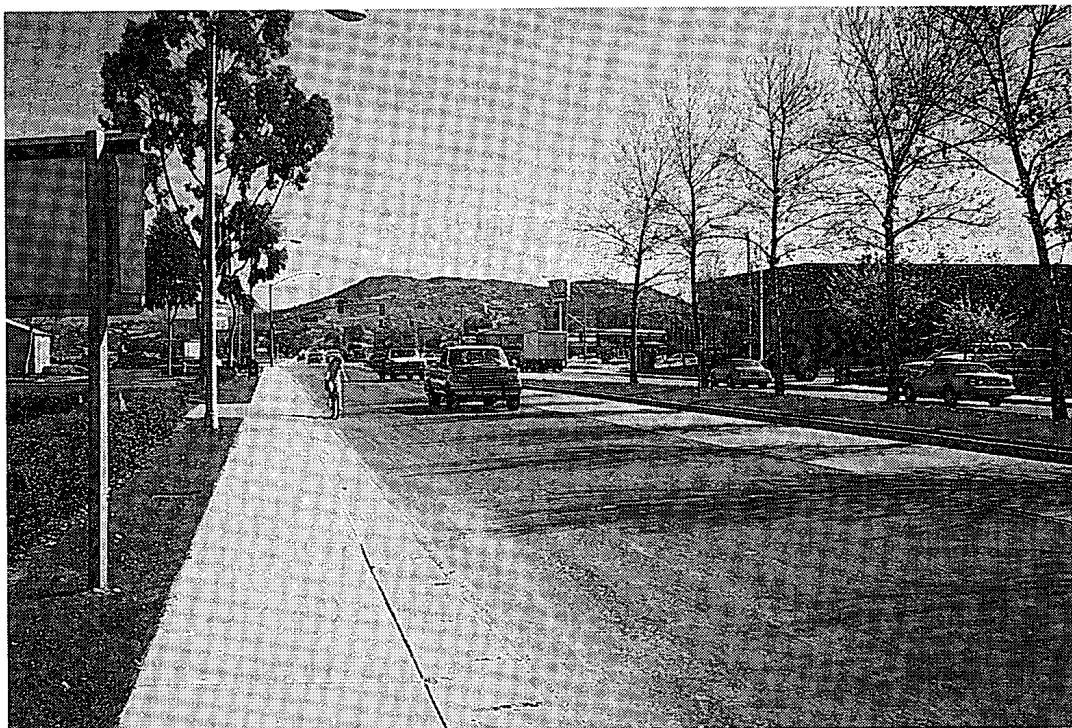
ように報復を始めたのである。私立学校をつぶそうとした州公教育長ビル・ホーニッギは彼の強引なやり方に対して創造論側からだけでなく州教育局内部からも反発を受け、彼は「利益相反」の重罪で有罪判決に追い込まれ、その政治生命を完全に断たれてしまった。他方、その私立学校は司法の認可を得て堂々と「科学と称して宗教教育をおこなう」ことが許されるという、まさに皮肉な結果に終わったのである。なお知事候補とまで噂され将来を嘱望された教育行政のトップがコミュニティー・サービスに服役するまでの転落の過程については、すでにまとめてある<sup>3)</sup>。

ちなみに調査がカリフォルニア州に限られているのは、1人の私費調査に行動と資金の限界があるからだけではない。他州とくらべて、やはりカリフォルニアには興味を引かれる特質がそなわっている。創造論が圧倒的に強い南部や中西部の諸州や進化論側が強い北東部の州とちがい、カリフォルニアでは両派が強い。そのため、「創造 vs 進化」論争が頻繁に対立として表面化するからである。じっさい、カリフォルニア州教育局と創造論者との闘いには30年近い歴史がある。この対立の歴史を州教育行政、学校区の教育委員会、公立大学、公立高校など異なる教育現場で観察し、限られた地域の中ではあるが、アメリカの今日的な「創造 vs 進化」論争を重層的に描き出せればいいと思う。

## 2 創造研究所と大学院プログラム

サンディエゴから東へ40キロメートルほどはいるとサンティーカウンティ市につく。このサンディエゴ・カウンティ内小さな町に私たちのめざす創造論組織の本部がある。ダウンタウン（次項写真参照）からメインストリートを車で10分ほど走り測道にはいると、ところどころに灌木の林が残る殺風景な工業団地の中に創造研究所が忽然と見えてくる。

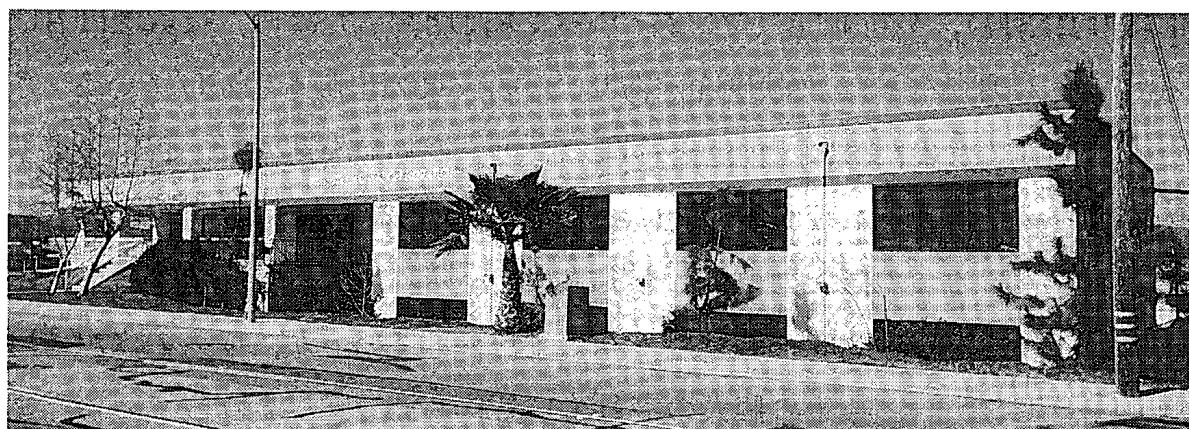
創造研究所（Institute for Creation Research, 通称 ICR, 住所は 10946



サンティー市ダウンタウン

Woodside Avenue North, Santee, California, 92071) は 80 年代前半から「創造科学」を公立学校に導入する運動を支えてきた、創造論運動の根拠地の一つである。1985 年にオフィスをかまえた二階建ての瀟洒なビルディング(次項写真参照)は床面積約 2,000 平方メートルの広さをもつ。かつてコピー会社の持ち物だったこのビルは細長い直方体で、まさに箱船をかたどったかのようで現代版「ノアの箱船」といってよい。1 階には実験室兼教室、事務室などがあり、2 階には 1992 年に完成した広さ約 400 平方メートルの「創造と地球の歴史」博物館、図書室、そして所長以下専任スタッフの研究室がある。

私が同研究所を訪れた 1992 年に所長をつとめていたヘンリー・M・モリス(ミネソタ大学博士、水文地質学専攻)は現在では高齢のため引退し、息子のジョン・D・モリス(オクラホマ大学博士、地質学専攻)があとを継いでいる。彼らをはじめ、デュエイン・ギッシュ(カリフォルニア大学バークレイ校博士、生化学専攻)、ケネス・B・カミング(ハーバード大学博士、生物



創造研究所のビルディング

学専攻、大学院プログラム校長)など10名ほどの専任研究員兼教員がいるが、彼らはいずれも自然科学の博士号をもっている<sup>4)</sup>。

もともと創造研究所は1972年にクリスチャン・ヘリティッジ・カレッジの研究機関として設立されたが、1981年に完全に独立し今日に至っている。現在では連邦政府教育局およびカリフォルニア州教育局から認可をえた正式な教育研究機関（非利益団体）として、「地球と生命の起源」にかんする科学的な研究、出版、教育に従事している。

具体的な活動としては、野外調査（グランド・キャニオンで isotopic ratio の測定）<sup>5)</sup>、教育方法研究（テキストや啓蒙書の出版）、探検（ノアの箱船探し、



John D. Morris, Ph.D.

Produced by

トルコのアララト山における  
「ノアの箱船」調査のビデオ・パッケージ

前項写真参照), 分析研究(ヤング・アースを証明するための, 大気圏におけるヘリウム調査など), 文献研究があり, その成果の出版も手がけている。さらに創造論普及のために「創造と地球の歴史」博物館を運営し, 科学の標準的カリキュラムと「あらゆる学問における聖書の権威」の教育を目的として大学院教育(4つの修士コース)も実施している。

財政的には, 年間300万ドルの予算で運営されているが, 歳入の内訳は出版販売, セミナー, 数千の個人の寄付(1人平均25ドル)となっている。また10万人以上の人々に送っているニューズレター『アクツ・ファクト』の購読料もあるが, こちらはむしろ広告の意味合いが強い。

事件の説明にはいる前に, この創造研究所大学院(The Institute for Creation Research Graduate School)のプログラムを詳しくみておこう。

1981年, 創造研究所は天文地球物理学, 生物学, 地質学, 科学教育の分野で科学修士号の学位プログラムを提供する大学院を設置し, その夏, 第一期生を迎えた。これら四つのプログラムはカリフォルニア州の私立高等教育課(The Office of Private Postsecondary Education)による審査を受け, 1981年6月に同州の正式な認可を受けている。また今から数年前に連邦教育局により認可された機関「国際キリスト教系カレッジおよび教育機関のための国際協会(The Transnational Association of Christian Colleges and Schools)」から大学院の設置基準を満たす機関として認可された。このように同研究所は州から正式な認可を受けてスタートし, その後連邦の認めるアカредィティーション機関からも正式に認可された教育機関となっている。

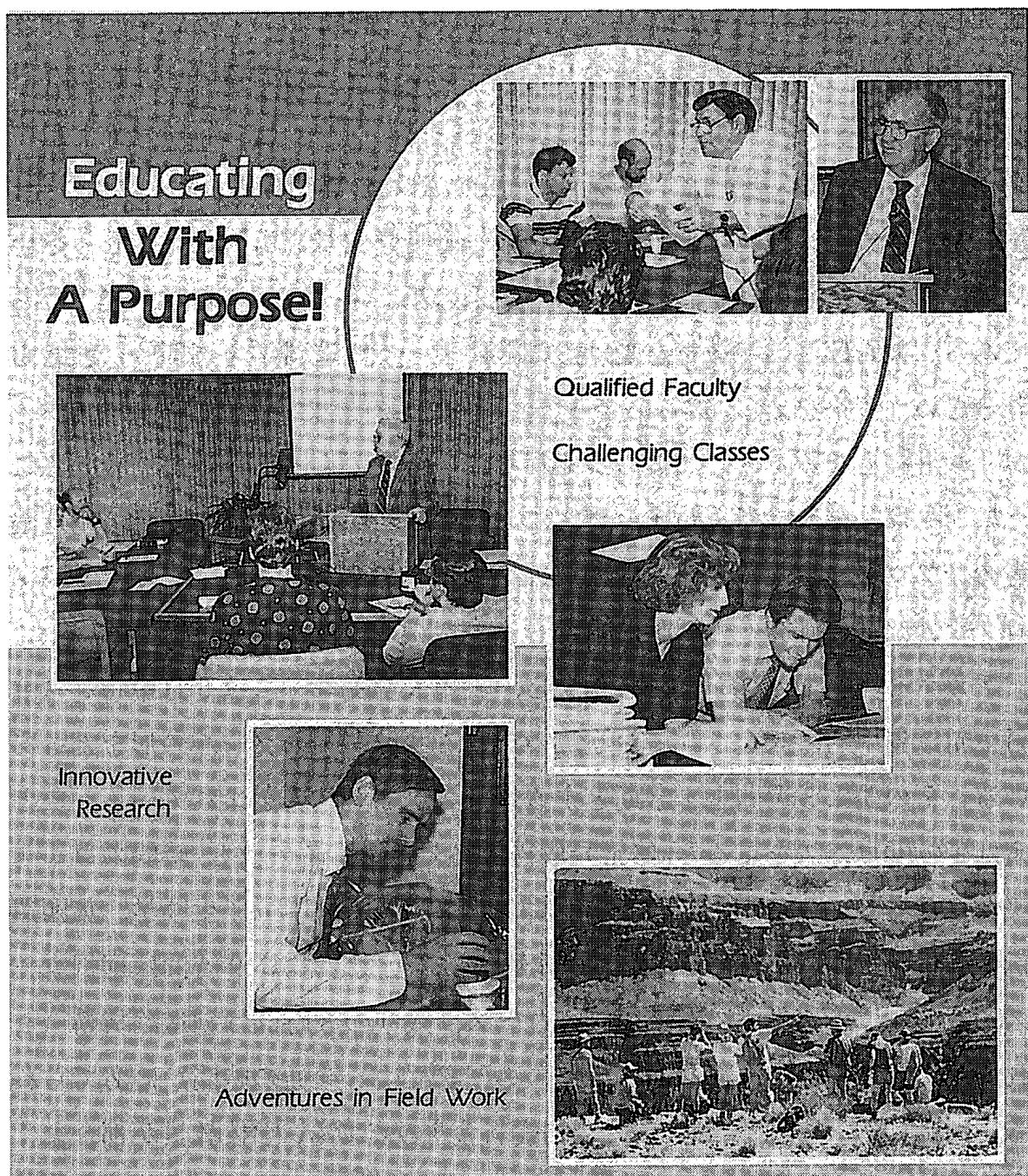
同研究所によると, この大学院教育の目的は科学的な調査と研究をとおして宇宙の真理を発見し伝えることだという。科学的データを聖書の創造論という「補助的な」枠組みのなかで互いに関連づけ応用する。そしてそれを標準的な科学教育を「中心とした」カリキュラムをもつ大学院プログラムのなかで効果的に実践することだという。いいかえると, オリジンの研究にかかる自然科学の諸分野で大学院レベルの教育を実施し, 創造論を科学として

研究し教育できる卒業生を送りだすことを主な目的としている。そして将来キリスト教徒に科学界と教育界のリーダーシップをとらせるという遠大な計画もっている。

この遠大な計画に参加できる条件は、それぞれの専門分野、とくに生物学、地質学、天文・地球物理学のいずれかの分野で学士号をもつこと。じっさいに入学する人たちは、全国のキリスト教系の小、中、高校の科学の先生たちである。彼らはここで教育を受けることによって創造科学を専門的に教えられるという資格をえる。彼らにとって、それはそのまま昇進ためのセールス・ポイントにもなる。また、彼らがそれぞれの学校にもどり創造論を教えることになれば、創造論者をねずみ算式にふやすことができる。つまり、創造論者のリプロダクション・システムが確立するのである。このように大学院プログラムは創造研究所の活動の中でもっとも大切な役割を担っている。

アカデミック・カレンダーを見ると、この大学院コースは6月中旬から8月下旬に集中的に設定されており、いわゆるサマー・スクールの形をとっている。その間に3週間を1学期とするコースが3つ詰め込まれている。たとえば生物学コースを見ると、修士号取得に必要とされるのは33時間のコースワークである。そのうち、15時間はコア・コース（細胞分子生物学、集団遺伝学と種分化、生物システム論、人体解剖学、生物思想）、9時間は選択コース、6時間は論文作成のための研究コース、残りの3時間は創造論特講（これは天文物理学や地質学などその他の専門課程にも共通の時間）にあてられる。ようするに、実施期間の点でも格安料金<sup>6)</sup>の点でも、学校教員が都合よく履修できるような便宜がはかられている。

また同研究所によれば、カリキュラムは大学設置基準局から認可された他の自然科学の高等教育機関のものと比べて見劣りしない。事実に基づく科学の標準的なコース内容を提供し、標準的な教科書、雑誌論文、他の学習教材が使われている。ただし同研究所の明確なミッションに基づいて、適宜、補助的な（聖書）解釈学的教材が提供される。これはキリスト教系の私立教育



創造研究所大学院プログラムの『入学案内』から

機関ならどこでもおこなっていることだし、憲法上保証された権利でもある、  
という。

確かに一般的にいうと、科学教育にたいするこの種のアプローチは他の科  
学教育機関と比べて本質的に異なっている。しかしニュートンやボイルなど

の科学の創始者たちのものと同じアプローチであり、アメリカのファウンディング・ファーザーズたちのアプローチとも同じである。しかも対立する自然観や哲学を幅広くフェアーにカバーしている。したがって、卒業生は世俗的な高等教育機関が教える分野を学べるだけでなく、オリジンと地球の歴史に関する科学的データの創造論的解釈も学べるのだ、と創造研究所は説明している。

### 3 州教育局による2度の審査と州認可取り消し

すでに述べたように、開校の時点では創造研究所の大学院プログラムに大学設置基準協会による認可がなかった。そのためカリフォルニア州教育局（写真参照）の正式な認可を得て、天文地球物理学、生物学、地質学、科学教育の修士号を与える大学院としてスタートしたのである。そして他の私立学校と同じように、開校の翌年から3年ごとに州当局の審査を受けることになった。そして82年、85年の審査には合格した。



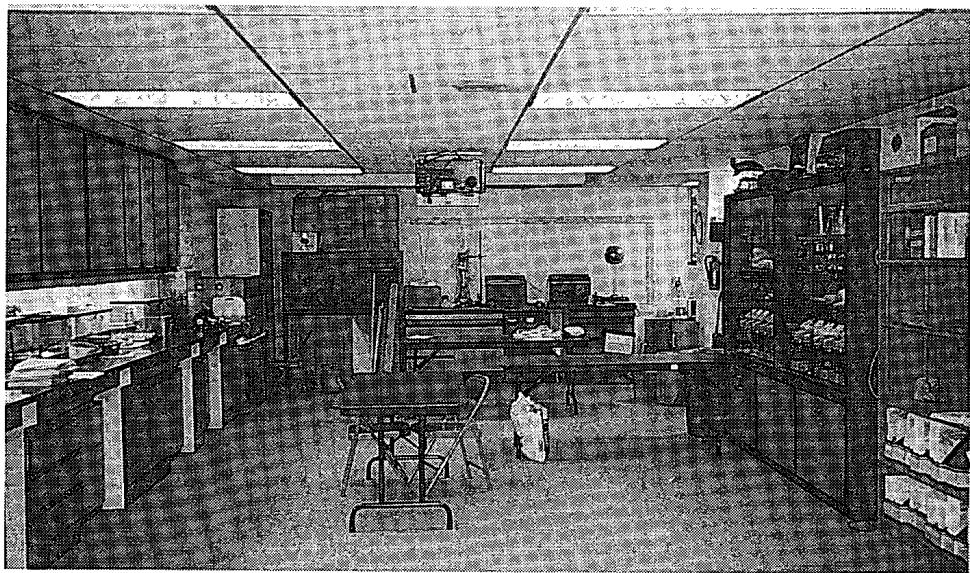
サクラメントのカリフォルニア州教育局

ところが1988年12月8日、当時のカリフォルニア州公教育局長ビル・ホーニッグは創造研究所大学院の州認可を取り消す意向を表明した。翌日、新聞は一斉に「創造研究所は科学の修士号を与えることを禁止された」と報道した。「創造論を科学だと思っている人はいない。最高裁も2年前に同じ判決を下している。だから創造論と称して創造論を教えるのは勝手だが、それに物理学や地質学の学位を与えるのはおかしい。とにかく宗教であって、科学ではない……。だから彼らに教育ライセンスを与えないのだ」というホーニッグの厳しいコメントが載っていた。

大学設置基準協会による認可は教育レベルやカリキュラムの質を中心とした審査により、専門的な第三者が客観的な判断を下したという意味をもつ。これにたいして、州当局は教育目的やカリキュラム内容などテクニカルな側面だけでなく、経営状況をふくめ幅広く審査する。これは入学金だけ集めて夜逃げするような悪徳業者から州民を守るための措置なのである。一般的に、大学設置基準協会による認可のほうに専門的な権威がある。

だからといって州認可を軽視することはできない。州から認可されないかぎり、その教育機関は学位をあたえることはできないし、補助金やローンを申請できない。またその学生が奨学金、奨学ローン、その他の金銭的援助の対象となることもない。学位も取れない、奨学金も出ない教育機関に学生が応募することもない。そうすると入学者数がしだい減少し、いずれは閉鎖に追い込まれることになるのである。つまり、州公教育長ホーニッグは同校廃止に等しい方針を発表したのである。

この発表にいたるまでに、州教育局は現地査察をふくむ調査を実施していた。もちろん州がまとめた『サイエンス・フレームワーク 1990年版』にしたがえば、調査をまつまでもなく州認可取り消しの条件がそろっていた。創造研究所の大学院プログラムの場合、科学教育のプログラムであると自己申告しながら創造論教育を実施していたのだから、それだけで十分な理由があった。しかしアメリカでは手続きを踏むことが大切とされる。とくに訴訟に発



大学院プログラムの実験室の一つ

展する可能性のある問題についてはことさら慎重な手続きが必要だった。

まず 1988 年 8 月、州認可更新手続きの一部として、5 人の「査察委員会」が現地査察を実施した。州の規定どおり、同委員会は 5 人の委員のうち 2 人は創造研究所側が指名した科学者で構成されている。この委員会は私立高等教育課にたいし 3 対 2 のスプリット・ディシジョンで認可の更新を上申した。

確かに査察委員会は肯定的な結論を出したが、その理由は新しい立派なビルがあるとか、健全な財政を保っているなど、教育の中味や質に関するものではなかった。つまり、大学院に学位付与を認める本質的な理由ではなかつたのである。さらに、その報告書には結論と矛盾するような内容がたくさんふくまれていた。

たとえば、コース・タイトルやカタログの説明どおりに授業がおこなわれていなかったこと。4 つの修士号コースにたいして 5 人の専任教員しかいなかつたこと。しかも専任教員は機関を離れ、進化論者との論争や募金に全国を奔走しているので、学生の監督指導をおろそかにしていたこと。講義の大半はビデオテープで行われていたこと。実験設備が不十分だったこと。そして、少なくとも提出される修士論文の半分は通常の科学的基準では受け入れられないものだったことなどが指摘されていた。参考までに修士論文の例

を挙げておくと、化石とは「ノアの洪水」で「ノアの箱船」に載せられた動物以外の動物が溺れ死んでできたものであることを証明するといった内容があつかわれていた。もちろんこれは神学ではなく科学論文として書かれたものだった。

このように報告書には「大学設置基準局によって認可された他の機関と質において矛盾しない学位を提供できる」という州認可の条件からほど遠い欠陥が数多く指摘されていたのである<sup>7)</sup>。

そこで州公教育長ビル・ホーニッグは信じがたいほど強引な行動に出た。査察委員会のメンバーをあらためて召集し、自分も参加しながら州認可問題を再検討させた。その結果、評決はくつがえされ、査察委員会は3対2で「カリフォルニア州は科学と科学教育における創造研究所の大学院プログラムの認可を更新しないほうがよい」という結論を出したのである。前回賛成票を投じたスタンフォード大学の地球物理学者ロバート・コヴァチ博士が反対にまわったからだった。

こうして1988年12月、現地査察委員会から「州認可取り消し」の上申を受けた私立高等教育機関評価委員会はそのまま州教育委員会に「州認可取り消し」を上申した。その理由は、創造研究所が地球物理学、地質学、生物学、科学教育の分野で州認可を受けている他の機関と同等のトレーニング・プログラムを用意していないということだった。もちろん、創造研究所が「創造科学」を教えていることも決定的な要因だった<sup>8)</sup>。

1989年1月10日、創造研究所はまず私立高等教育機関評価委員会で事情説明をする機会を与えられた。ここで創造研究所は意外にも懐柔策をとった。憲法上の権利を楯に真正面から衝突するだろうとの予想を裏切り、妥協案を提示してきたのである。科学の修士号を与える権利を保持するかわりに、創造研究所大学院は通常の科学コースから生命の起源にかんする創造論的内容を切り放すと提案した。つまり、自分たちはコースから創造科学関連の要素を取り除き、ストレート・サイエンスを教えるという意味である。

これにたいして、私立高等教育機関評価委員会は聖書の直解に基づく創造論的教育を10分間の授業に限定し、通常の科学教育は一時間の授業とするという調停案を出し、両者は合意した。同委員会は委員長ジョゼフ・バラキンは「新たな査察委員会が（1989年の）夏にもう一度同大学院を訪問し、このたび提案された教育時間の変更が遵守されているかどうかチェックする」とことになったと伝えた。州はその要求に応じ、あらためて組織される査察委員会が再び創造研究所を訪れることになった。この調停について、創造研究所所長ヘンリー・M・モリス博士<sup>9)</sup>（写真参照）は新聞インタビューに次のようなコメントを発表した。「私はこの調停案に満足していない。これではまともな教育はできないと思うからだ。それでも長い裁判になるよりもかもしれない」と。

この調停案によって、両者には裁判での全面対決を避ける見通しが開けた。この時点で裁判の可能性がゼロになったわけではない。しかし再査察のあと創造研究所大学院プログラムについて肯定的な評価が出され、それに基づいて州認可が更新されることになれば、両者は裁判で争わなくてすむ。どちらにも裁判に使う経費とエネルギーの余裕がないという意味で、調停案には試してみるだけの価値があったのである。

州教育局サイドには弱味もあった。すでに述べたように、査察委員会が最初に出した州認可更新の結論は州公教育長ビル・ホーニックの干渉によって翻っていた。確かにホーニックの弁明の通り、3対2の決定では説得力がないし、2人の科学者はそれぞれ詳しいかなり批判的な意見を述べていたので、職務上あいまいな評決や報告書に基づいて決定できないという事情があっ



創造研究所所長 ヘンリー・モリス博士

た。だから同委員会に慎重な討議を重ねてもらって、確固たる結論を上申してもらう必要があった。

しかしホーニッギの風貌や強引な性格<sup>10)</sup>や職権を考えると、このような好意的解釈が世間に通用するとはとても思えなかった。「査察委員会→高等教育機関評価委員会→州教育委員会→州公教育長」という順序で上申され、最終的な判断をするのはホーニッギ自身だった。その彼が最初の段階で誤解されるような行動に出たのである。じっさいどこまで干渉したかわからないが、反対投票を強制するという職権乱用の疑いをかけられても仕方のない行為だったといえる。

しかも彼の創造論ぎらいは有名だった。新聞やテレビのインタビューで、「創造研究所が宗教や創造の単位を与えるのは誰も止められない。しかし彼らは科学の学位を与えようとしている。あそこの人たちが学んでいるのは科学ではない」などと繰り返し発言してきたのだから<sup>11)</sup>。とにかくみすみす相手につけいる隙を与えてしまったのである。

他方、創造研究所は再査察に応じることはせっかく掲んでいる州教育局の弱味を失ってしまうかもしれない選択肢だった。また前回の報告書で大学院プログラムの欠点がいくつも明らかにされているのだから、州教育局はわざわざ意地悪な科学者を選ばなくともふつうの科学者を派遣するだけで、否定的な報告書が出される可能性が高かった。

しかしそれでも創造研究所にとって、裁判はリスクが多すぎた。万が一敗訴となれば、州認可は取り消され、死刑宣告を受けることになる。彼らにとって裁判は生き残りを賭けた一か八かの選択だった。だから一縷の望みを託して再査察に応じたのである。

1989年の8月初旬、新しい5人の委員が任命され、創造研究所を訪問した。規定によって5人のなかには査察される機関が指名した個人が1人ふくまれていた。査察を終えたチームの一人カリフォルニア州立大学ロングビーチ校の物理学者ローレンス・S・ラーナーは創造論教育が致命的だと述べると

同時に、プログラム自体に欠陥があることを強調し、次ぎように新聞インタビューに答えた。「ひどい修士論文をたくさん見た。なかには創造論を使って科学法則を歪曲しているものさえあった……。チームはカリキュラムの質、コースの数（4 コース）とスタッフの数（8 人）の不釣り合いにもとづいて、大学院プログラムにたいし否定的な結論を出すだろう」と。5人の委員はできるだけ早く報告書を提出することになっているが、ランナーはおそらく州認可取り消しを上申するだろうと述べた。

他方、創造研究所は新聞インタビューにたいし広報を通じ「創造論に使う時間は授業の 5 %未満だ。しかもそれを勉強する人はほとんどいない状況だ」と述べた。副所長ジョン・モリスは「州は創造論を教えるという私たちの権利を尊重しない頑固な進化論者の委員会を派遣した……。いったいどこに量子力学や地層学を教える神学があるのか。私たちが教えているのは神学ではなくて、厳密な科学だ」とコメントした。

1990 年 1 月 17 日、州教育局査察チームは創造研究所の大学院プログラムにたいする州認可取り消しを上申した。報告書を見ると、同研究所の科学教育が他の同様の高等教育機関に匹敵しないことを協調していた。つまり、他の高等教育機関が認可の条件として要求されているものにくらべると、全体としてカリキュラムは質的に劣るし、一貫性がない、それぞれのコースの内容も劣る。さらに、同研究所のスタッフには見るべき研究業績がない、図書館や実験室は設備不十分である。また、科学教員の養成を目的にしているが、それに必要なコースを提供していない、ということが強調されていた<sup>12)</sup>。

ホーニックによればこの否定的な結論と州認可取り消しの上申は 5 人の委員の全会一致によるものだという。しかし報告書を細部まで見ると、スイーダーヴィル・カレッジの物理学と数学の教授リーロイ・E・アイマーズは結論の一部に反対し、生物学をのぞく地質学、物理学、科学教育における修士プログラムについては州認可を存続させるべきだと上申していた<sup>13)</sup>。

いずれにしても、査察チームの上申は私立高等教育機関評価委員（18 人）

で審議され、2月後半には州認可取り消しが州教育委員会、さらに州公教育長ホーニッグに上申される。それを受けた彼が州認可を取り消す公算はきわめた高かった。両者和解の道はつかの間の幻として消えた。

3月、州教育委員会評価チームの勧告を受けて、ホーニッグは創造研究所の大学院プログラムへの州認可を取り消した。こうしてホーニッグと創造研究所の全面戦争が始まった。

これまで州教育局は創造研究所が科学を教えるといいながら宗教を教えていることを強調してきた。創造論を教えていたから州認可を取り消すと繰り返し述べてきた。しかし今回の報告書では、科学教育が標準以下だから州認可を取り消すと言葉を変えてきた。ホーニッグ自身も「好きなだけ創造論を教えてもいい、科学をきちんと教える限りは。しかし、コースの範囲やカリキュラムの質が標準に達していない」と批判の矛先を変えている。

言うまでもなく、こうした論点の移行には訴訟を想定した配慮があったと思われる。常識的に考えれば、確かに疑似科学を教える大学院プログラムは不適切かもしれない。しかし創造研究所が認可取り消し措置の撤回を求めて裁判に持ち込んだ場合を考えると、そこでは必ず創造論に科学的妥当性があるかどうかが争われる。この争点は80年代を通して、アーカンソーやルイジアナの連邦地区裁判所でとりあげられ、1987年には連邦最高裁判所が創造科学は宗教だという判断を下している。

しかし最高裁判決は全会一致の確固たる決定ではなかった。9人の判事のうち、2人が判決に反対していたのである。したがって、この2人と同じ考え方を持つ判事が来るべき「創造研究所 vs 州教育局」裁判を担当することになれば、創造科学に科学としての市民権が与えられてしまうことになりかねない。そうなれば、問題は私立学校の枠を超えて、公立学校まで飛び火することになる。これは州教育局にとってあまりにリスクが大きいと言わなければならない。

しかも、創造研究所の有能な顧問弁護士ウェンデル・バードは先の最高裁

判決で法的には傷物にされた「創造 Creation」という言葉を避け、「Abrupt Appearance Theory」という言葉で創造論を表現している。最高裁判決で学んだ教訓が「創造 vs 進化」論争を「二つの科学的見解のあいだの純粹に科学的な論争に見せかけようとする彼らの努力にいかされているのだ。科学的訓練を受けていない裁判官に科学とは何かをきめることはいっそう難しくなっていたのである。

かりに先の最高裁判決の判断が踏襲されたとしても、創造科学研究所は私立学校であるから、公立学校と同じ制約を受けるわけではない。同研究所には自分たちの宗教の自由を制限される理由はないのである。したがって、創造論教育を理由に州認可取り消しを決めるのは、州教育局の真の目的を達成する方法として適切ではなかったのである。

とにかく州教育局による州認可取り消しの目的は、「宗教教育に科学の学位を出そうとする」創造研究所の試みを阻むことだった。そのためには、厳密な基準で大学院プログラムが大学設置基準の認可を得ている他の高等教育機関に比べて著しく劣っているという理由が必要だった。しかもその理由は正当な手続きを経て指摘されなければならなかつたのである。これこそ州教育局にとって、2度目の査察をおこなう本当の目的だったのである。

他方ホーニングの州認可取り消しの発表により、創造研究所はとことん追いつめられた。同研究所大学院は閉鎖の瀬戸際に立たされた。残された道は、一方で訴訟の準備を進めながら、他方でホーニングに政治的圧力をかけるしかなくなつた。しかし彼らに時間はなかつた。反撃が遅れるだけ、州認可取り消しは学生数の減少を確実にもたらしていくのだから。

## 4 裁判と判決

1990年4月13日、創造研究所は州教育局および州公教育長ビル・ホーニッグ、同局私立高等教育機関部の部長ジョゼフ・バラキン、部長代理ジーン・バードを相手取りサンディエゴの連邦地区裁判所に訴え出た。修士号を授与するライセンスの剥奪により憲法で保証された権利を侵害されたというのである。

提出された23ページの告訴状は次のように訴えていた。州教育局とホーニッグは同研究所の大学院プログラムから言論の自由、宗教の自由、そして正当手続きを剥奪した。訴訟は州認可取り消し処分の撤回、特に指定のない損害への賠償、裁判費用の負担を州に命令するよう要求する。問題は「オリジンの見解が正しいかどうかということではなくて、私立の教育機関が学生に州の公認解釈を教え込むこと、そして他の解釈を検閲することを強制されるかどうかということである」と、裁判の焦点を規定していたのである。

創造研究所副所長のジョン・モリス（写真参照）は新聞インタビューに応え、「もし州がキリスト教系私立学校にキリスト教の教義を教えてはいけないと命令できるならば、州の権力はあまりに大きすぎる。私たちは州に創造論が正当な科学的解釈だと規定することを要求しているのではない。また公立学校の教育に創造論を含めてほしいと要求しているのでもない。ただ言論の自由を要求しているのだ」と述べ、さらにホーニッグの目的を聖書にもと



創造研究所副所長ジョン・モリス博士

づいて地球と生命の歴史を解釈する同研究所の閉鎖だと決めつけた。

州規制に反対する訴訟では、原告が法に則った「正当手続き」を受けたかどうかが焦点となることが多い。すでに述べたように、州認可取り消しの決定は単純ではなかった。とくに最初の査察委員会の上申は、ホーニッギの干渉によって作り出されたものであるという印象が強かった。創造研究所はすかさずその点について、非宗教機関には決して示されないような偏見が自分たちに示された。つまり、ホーニッギと州教育局は手続きを歪曲したことでカリフォルニア州法に違犯し、創造研究所は正当手続きにたいする権利を奪われたのである、と訴えたのである<sup>14)</sup>。

また、創造研究所の大学院プログラムは1989年においてもっとも充実していた。州教育局は見劣りのする1981年、84年、88年のプログラムにたいし州認可を与えておきながら、89年にそれを取り消すのはまったく理不尽である、とも指摘していた。そして、1989年夏に創造研究所を査察した二度目のチームは最初から否定的な結論を引き出すために「意図的に構成された」チームだったと主張していた<sup>15)</sup>。

そもそも州認可そのものがいい加減であると主張した。創造研究所副所長ジョン・モリスは新聞インタビューを利用して、「ホーニッギの州教育局では同性愛のテクニックを教える同性愛者の壳春宿のような機関に州認可を与えているが、まさか州はその考え方を保証してはいないだろう。そのパンフレットは全裸の男たちが行為にふける写真にあふれている。この場合州の保証があるかどうか話し合うまでもないと思うのだが」と発言した。つまり、州認可のいい加減さを過去の事例で証明しようとした。

このようにして、創造研究所は州教育局の根拠を一つ一つ潰してきたのである。

形勢不利と判断したのか、州教育局は裁判所がこの訴訟をとりあげるかどうかの判断を下す前に、先手を打ってきた。州教育局は1990年11月7日づけの書面で、州認可問題についての方針変更を創造研究所に通知した。それ

によると、同局は同研究所から科学の修士号を付与する資格を剥奪しようとしてきたこれまでの方針をあらため、州認可を継続するというものだった。

しかもホーニッグをこの問題の採集決定者からはずすための制度改革も実施した。これまで私立高等教育機関評価委員会は州教育局の下部組織として州認可を検討してきたので、その最終決定権はホーニッグにあった。カリフォルニア州ではこの制度を改め、1991年から同委員会を州教育局から独立させ州機関に格上げすることにしたのである。したがって、ホーニッグはこの問題を決める15人の委員の1人になり、彼の権力は著しく縮小されることになった<sup>16)</sup>。

この新しい州機関は州教育局から仕事を引き継ぎ、創造研究所の科学の定義、科学教育と宗教の自由との関係など、やっかいな問題について内部でも、また同研究所とのあいだでタフな論争を続けていくことになり、いずれは同研究所の大学院プログラムにたいし最終的な評価を下すことになった。

州教育局の後退は、やはり裁判を睨んでのことだった。裁判になればホーニッグの行き過ぎた干渉が正当手続きの無視として問題になることは明らかだった。したがって、州は一時的に州認可を回復することで、創造研究所から告訴の理由を奪おうとした。さらに巧妙なことに、州認可を取り消した組織を抹殺したうえで、裁判所の告訴却下を期待したのだった。

1981年以来、生物学、地質学、物理学、科学教育の4コースにおいて25人の修士を出してきた創造研究所の大学院プログラムは確かに生き残った。副所長ジョン・モリスは、州教育局が州認可を回復したことを見て、「これは勝利だといってよい。しかし州サイドの見解は変わっていない」と述べた。つまり、州認可の回復は部分的勝利でしかなく、闘いはこれからだと強調したのである。確かにこの問題が「ホーニッグの手から離れたことは喜ばしいこと」だった。しかし、モリスはこの制度上の変化を歓迎しながらも「幻想はいだかない」と述べ、州機関に格上げされた新しい委員会が同研究所にたいしこれまでより好意的な態度を取るとは思わないと悲観的な見通しを明ら

かにした<sup>17)</sup>。

さらにたとえ州が創造研究所には実質的な被害がないという理由で裁判所に同研究所の訴えを棄却するように求めたとしても、彼らは州教育局の「魔女狩り」によって世間の評判が下がり、入学者が減少したと訴えている。前年4月に起こした民事訴訟の審理が進行していた。

しかし1991年2月19日州教育局の期待通り、連邦判事ルディー・M・ブリュースターはサンディエゴ・カウンティーの東部にある小さな大学院が前年4月に起こした民事訴訟を却下する判定を下した。創造研究所は州公教育長ホーニッグと彼のアシスタントのジョゼフ・バラキンが州認可取り消しによって同研究所の科学修士を付与する権利を剥奪しようとして、憲法上の権利を侵害したと申し立てていた。これにたいして、憲法のもとで訴訟をまぬかれているという判定で、州教育局および州官僚にたいする民事訴訟を却下したのである。

判定理由についてブリュースター判事は説明した。法律的には、その2人の人物がとったいかなる行為に対しても州に責任はない。一般的に州官僚は法的挑戦から保護されるべきだと思う。公僕は薄給である。もし彼らがつねに訴訟にさらされているなら、優れた人がその仕事につかなくなるだろう、と。さらに、州認可は回復されているのだから訴訟は法的に無意味であると、判事は説明した。

ただし創造研究所大学院がもしその原告の最初の申し立てを修正すれば、州公教育長ビル・ホーニッグと1990年4月の訴訟の時点で州私立高等教育課の課長だったジョゼフ・バラキンにたいして民事訴訟をすすめることは可能である、ともつけ加えた。つまり、創造研究所の訴訟は州官僚としてではなく個人としてのホーニッグとバラキンにたいしてのみすすめられるという判定だった。確かにここまででは州教育局の思惑通りだった。

ところが、創造研究所の優秀な顧問弁護士ウェンデル・R・バードは例外的な法的議論を持ち出して、この判定を覆すことに成功した。バードは創造

研究を元ニューヨーク州選出の下院議員アダム・クレイトン・パウェルにたとえたのである。1969年の最高裁の判決によると、連邦下院が政府基金の不正支出の申し立てによって1967年パウェルの議員資格を剥奪したのは違憲だったと述べられている。しかも最高裁の判決が下る前にパウェルは下院議員に復帰していたが、パウェルの主張を法的に無意味なものにはしなかった。同じように、創造研究所の大学院も州教育局との論争で名誉を傷つけられ、学生数も減少した。自分たちも世間や学会における名声の再確立と、連邦裁判所における「名誉回復のための裁判」という救済を求められるはずだ、と<sup>18)</sup>。

このバードのアナロジーに動かされ、ブリュースター判事は創造研究所の主張は法的に意味がないというさきの判定を撤回した。創造研究所もパウェル元議員と同じように汚名をはらすために訴訟をおこしているという事実を重視し始めた。「パウェル元議員は汚名をはらしたかったのだ……。創造研究所もまた評判をとりもどしたいのだ」と述べ、パウェル事件を調べ10日以内に決定する方針を明らかにした。ブリュースター判事が創造研究所にホニッギとバラキンを州官僚の権能を有したものとして訴えることを認めるのはほとんど確実になった。

こうした名誉回復のための裁判では、たとえ勝訴しても損害賠償を期待できるわけではない。期待できるのはせいぜい裁判費用の支払い命令だけである。それでも創造研究所がこの名誉回復裁判を求めたのは、おそらく新しくできた州機関私立高等教育機関評価委員会の動きを牽制したかったからであろう。この先、同委員会は創造研究所の大学院プログラムにたいし最終的な評価を出すことになっていたからである。

3月13日、大方の予想通り、サンディエゴの連邦地区裁判所判事ルディ・M・ブリュースターは創造研究所が州公教育長ビル・ホニッギにたいし民事訴訟をすすめることになったと発表した。14ページの陳述書には、創造研究所はホニッギと2人の州教育局職員にたいし金銭的な損害賠償を請求することはないが、確認判決による創造研究所の救済と名誉回復を求めるこ

になるだろうし、また確認判決による救済が適切かどうかを決めるとき、裁判所は原告の名誉回復の要求を尊重するだろうと書かれていた。さらに個人としてだけでなく州官僚としての権能においてホーニッギを訴えることを認めていた。ブリュースター判事は新聞インタビューに答え、「原告が憲法上の弁明について関心をもたせるのに十分な名誉の損害を申し立てているのは明らかである」と述べた。

創造研究所副所長のジョン・モ里斯はブリュースター判事の決定に勝利宣言を出した。「もしこうならなかったら、ほとんど私たちは生き残れなかつたかもしれない」と前置きしながら、「私たちはキリスト教系学校がキリスト教的見地から科学を教えるのは憲法に合致しているはずだ。これで裁判に行ける」と述べた。創造研究所は宗教学校であって科学学校ではないというホーニッギの主張との戦いにおいて、ようやく攻めに転じることができたのである。

それから約1年後の1992年1月29日、サンディエゴの連邦地区裁判所判事ルディ・M・ブリュースターは、州教育局の職員が科学の修士号を与えるライセンスを剥奪しようとしたとき、学校の憲法上の権利を侵害したと判断し、州教育局に225,000ドルの支払いを命じた。

創造研究所はルディ・M・ブリュースター判事の1月29日の判決を、私立学校が自分自身の宗教的見解を教える権利をもつことを再確認したものとして歓迎した。「教育者として、私たちはビル・ホーニッギの政治的に正しい見解を強制されるのではなく、自分が選んだものを教える自由を持つ.....。アメリカでは私たちはキリスト教系の学校としてキリスト教的見地から教える憲法上の自由をもつ」と、ジョン・モ里斯副所長はいう。

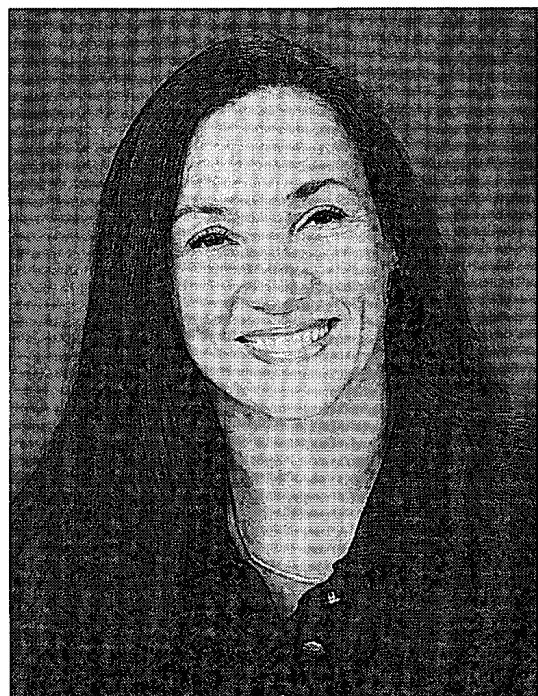
しかし州教育局は確認判決が州にとって敗北であるということを否定して、学校に与えられた保証条項は法的に無意味である、なぜなら州教育局はもはやその規制にかかわっていないから、と述べた。昨年議会で設立された15人の州委員会は、1995年1月までに創造研究所を評価することになってい

る。そこには20人の学生が在籍し、その決定はおそらく研究所のコース内容にかんする論争を解決し、学校がカリキュラムやプログラムにかんする法的必要条件を満たしているかどうかを決めるだろう。

「私はこの判決を研究所のいかなる学生にとっても研究所から得る学位の価値に依然として疑いを残すものだとみなしている……。彼らに学位を与える能力があるかどうかという真の問題はまだ扱われていないし、それは新委員会によって扱われるだろう」と、州教育局のスポークスウーマン、スージー・ラングはいう。

どちら側も金銭的解決の詳細を論じていないが、創造研究所の副所長ジョン・モリスは学校は裁判に要した費用は250,000ドルだったと述べている。州教育局は完全に敗北したのである。

彼らの大学院は「ブードゥー教学習のための小屋」、「中世的ナンセンス」などとマスコミからさんざん揶揄されてきたが、この事件の結末を見るとむしろ侮れないことがわかる。確かに彼らの主張はアメリカ世論の中心から相当外れているし、その支持者数も少ない。しかし、州教育局からの執拗な挑戦、マスコミからの攻撃に耐えることができた。それは単に追いつめられて窮鼠が猫を咬んだだけではなく、彼らの指導者たちが相当賢くまたボーカルな人たちだったからである。



州教育局のスージー・ラング

## 5 ホーニッグの失墜と創造研究所の発展

州公教育長ホーニッグについて簡単に説明しておきたい。ビル・ホーニッグ（本名ルイス・ホーニッグ）は1937年4月23日サンフランシスコで生まれた。広告業を営む裕福な両親のもとで順調に育った彼は、カリフォルニア大学バークレイ校に入学した。1958年に卒業したあと、2年間陸軍士官を務めてから、カリフォルニア大学バークレイ校に復学し、1963年には法律の学位を取得している。

このあと彼は法曹界の仕事につく。

まず、当時のカリフォルニア州最高裁判所長官マシュー・トブリナー（彼のいとこにあたる）の秘書をしばらく勤めた。見習い期間であったが、典型的なリベラルのトリブナーのもとで働くうちに、ホーニッグもまた政治的にはリベラルな態度を身につけた。秘書を辞してからカリフォルニア州財務局の顧問弁護士となるなど、しばらくは州関連の仕事にとどまる道を模索したが、それは長続きしなかった。そしてサンフランシスコのペティット・アンド・マーティン社に就職し、顧問弁護士として落ちついたかにみえた。

しかし1971年、法律の仕事に満足できなくなったホーニッグは家族の大反対を押し切り、これまでの経歴を一切すて、州立サンフランシスコ大学大学院に入学した。1972年に教育学の修士号を取得したあと、サンフランシスコの不景気で危険な地域ハンターズ・ポイント周辺の小学校で教鞭をとること



ビル・ホーニッグ

になった。転身まもない1973年6月、現在の妻ナンシーと結婚(再婚)している。

弁護士に満足できなかった彼が、それより薄給の教職に満足できるはずはなかった。この下積みを妻の励ましでしのいだホーニッグは再び上昇し始めた。当時のエドマンド・ジェリー・ブラウン州知事に任命され州教育委員会の委員を務めたあと1979年、サンフランシスコ北の学校区リード・ユニオン・イーレム学校区の教育長に任命された。そこは裕福な人々が住む郊外の小さな学校区であったが、教育行政を志したホーニッグは念願の足がかりをえたのである。しかし小学校で教えたことはもちろん、この教育長の椅子さえ彼にとっては次なるステップへの踏み台にすぎなかった。

1982年、ホーニッグは45歳にしてとうとうカリフォルニア州の公教育長に当選した。わずか10年で、新米教員から学校区教育長をへて同州教育行政のトップへとのぼりつめたのである。まさに華麗なる変身だった。公教育長として彼は、カリフォルニア州の1029の学校区、それらを地区ごとにまとめる58のカウンティ教育長を統括し、同時に州教育局の局長をかね、州レベルの教育関連の委員会に参画することになった。また、州教育局はホーニッグの指導のもとで、教科書を選定し、教員に任免状を発行することになったのである。

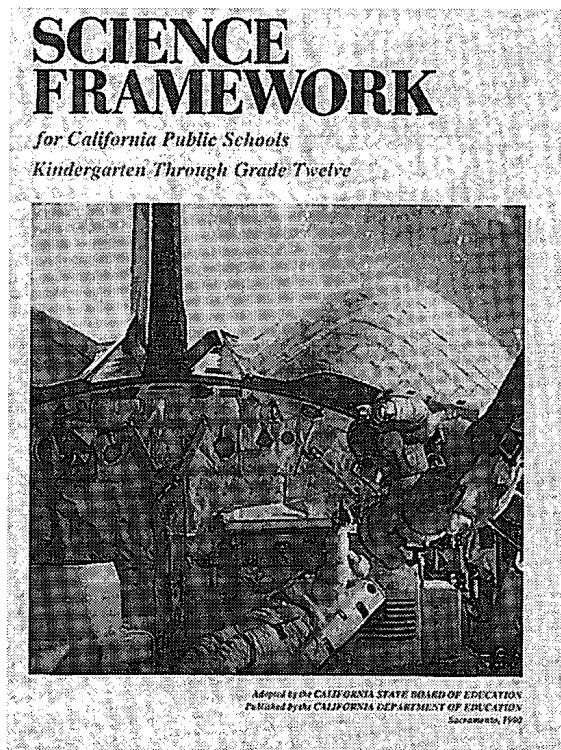
このようにビル・ホーニッグはまさに日の出の勢いで登場した。そしてそれ以来、カリフォルニアの教育行政をリードし続けたのである。第一期目で、公立学校のカリキュラム改革に成功した。1日の学校時間と1学期を長くし、高校卒業には英語、数学、科学、その他の分野の基本コースの修得を義務づけた。さらに、クラス担任手当を制度化し、教員の給料を引き上げ、無能な教員を解雇する手続きを制度化した。つまり、公立学校の教育をあらゆる角度から効率化しようとしたのである。

第2期目にはいると、彼は「正しく教えなければいけない」というスローガンを掲げ、とくに科学教育の内容、なかでも進化論教育を充実させようと

した。その方針は三つあった。第1に、教科書出版社へ圧力をかけ、州認可の生物学教科書を生物進化論を強調するものに限定すること。第2に、『サイエンス・フレームワーク』(1990年、写真参照)という科学科目的指導要綱を制定し、とくに生物の起源の教え方をいっそう厳しく制限すること。これらの方で公立学校の教室から創造論や創造科学を一掃しようと考へたのである。

そして第3に、創造研究所の大学院プログラムの州認可を取り消そうとした。これは一種の見せしめであった。またホーニッグには政治的な功名心もあったかもしれない。この研究所をつぶせば、彼は民主党リベラルの全国的な指導者としての地位を不動のものにできる。大統領候補の道も開けたかもしれない。しかし反対勢力の巻き返しも必至の人生の賭でもあった。ホーニッグと創造研究所との争いは、1987年同研究所が州認可の更新を申し込んだときに始まった。大学設置基準局から認可されない高等教育機関は州認可がなければ学位を出せないことになっている。ホーニッグはこの規定を利用して同研究所の大学院プログラムをつぶそうとしたのである。

しかしこうした反進化論教育の徹底弾圧は予想通り宗教的右派をそうとう刺激した。進化論教育に反対する創造論者だけでなく、性教育、人工中絶、同性愛に反対する人たちを合わせた、いわゆるキリスト教ファンダメンタリストが団結して反ホーニッグ・キャンペーンを開始したのである。そしてホーニッグの人気急上昇を政治的に恐れていた共和党勢力がこの動きに同調したのである。州公教育長2期目の後半からホーニッグは急速に失速はじめ



『サイエンス・フレームワーク』

た<sup>19)</sup>。

彼らの反撃は具体的な成果としてあらわれていた。1度目は、論争の末1990年11月に採択した科学教科書のための「カリキュラム・ガイドライン」の記述を変更させられたこと。ホニッギは進化を科学的事実として定義したかったのだが、彼らの圧力で仮説として表現することになった。この表現は進化論とは生命の起源と歴史に関する科学的に証明されていない、いくつかの仮説の一つにすぎないことを意味する。もちろん創造論も仮説の一つである。そして2度目が1992年1月29日、サンディエゴ連邦地区裁判所が出した今回の判決であった。ホニッギは創造研究所潰しに失敗したのである。

この判決が出たときにはすでに3度目が始まっていた。これについては右派からの報復なのかみずから不徳のいたすところかがはっきりしない。ただし、右派の圧力がホニッギ追求の手を厳しくしたのは確かである。

1992年2月24日、サクラメントの州大陪審が「利益相反」という州法違反でホニッギを起訴したのである。それによると、ホニッギは連邦政府の財源337,509ドルを妻ナンシーが経営する教育コンサルタント会社の社員の給与とした。しかしカリフォルニア州には州職員は「自分の権能によって結ばれた契約、または自分が属する団体や委員会によって結ばれた契約から金銭的な利益を得てはならない」という「利益相反」を禁止する法律がある。この州法違犯は重罪に相当し、最高三年の懲役刑となる。約一年後の1993年1月29日、カリフォルニア州上級裁判所陪審はホニッギを有罪と認めた。

これでビル・ホニッギは完全にその政治生命を断たれたのである。勢いにかけりが出始めると、民主党側は誰も彼を助けなかった。見捨てられた彼は、孤立無援の戦いの中、いさぎよく討ち死にしたのである。

そして1998年2月21日『サクラメント・ビー』紙の一面が伝えるところでは、州検事局でホニッギ・スキャンダルの捜査を指揮した州検事総長のダン・ラシグレンが共和党から今秋の知事選に出馬する意向を固めたという。いうまでもなく、彼はホニッギを起訴し有罪に追い込んだ中心人物である。

保守派のホーニング潰しに協力し政治的ライバルを葬り去り、今度はその見返りとして保守派の後援を受けて、州知事に立候補するというのである。彼が当選すれば、創造論者をはじめとするキリスト教ファンダメンタリストには力強い味方ができることになるだろう。

1992年9月18日、こうしたホーニングの転落とは対照的に、創造研究所は判決以後も安定した活動を続け、ミュージアムを改装オープンさせている。また危機をのりきった大学院プログラムは卒業生を送り出し、設立10年でおよそ150人学生を入学させそのうち25人に科学の修士号を出している。こうした充実感の中で、改装に5万ドルかけた「創造と地球の歴史」博物館のオープン・デイを迎えたのである。当日、博物館はクッキーをもった子どもたちであふれ、東部や中西部からはるばる訪れた人もいたという<sup>20)</sup>。

単なる展示室にすぎなかつたものが、幻想的な迷路のように改装された。副所長ジョン・モリスの言葉を借りると、「私たちが現在の世界で観察するこ



「創造と地球の歴史」博物館を見学する人たち

とは神のことばで書かれていることと一致する」という方針で展示物が並べられている。地球とその生命は6千年前から1万年前に1週間で突然創られたのであって、45億年前に起こったわけではないことをわかりやすく説明するための配慮がなされているという。毎年何百人の子どもたちが「イエスの救いをどのようにして知るか」とか「キリストの再来が近い」といったメッ

セージで迎えられ、生物進化論のあらさがしを学ぶ。月曜から土曜の9時から4時半まで開館し、入場料は無料。

展示の中味は、ジェネシスから始まり、宇宙<sup>21)</sup>、洪水、氷河時代、バベルの塔、進化論者という「サタンの系譜」<sup>22)</sup>で終わる。

そのハイライトはノアの洪水と箱船の展示である。「箱船ルーム」とモリスが呼ぶ部屋はフロアリングがほどこされ、箱船の床と同じになっている。ノアの箱船にたいする信念の証拠として、モリスはトルコ東部の1万7千フィートの山アラト山へ20回探検している。その山の中腹に箱船が座礁したと思われている。「それをまだ見つけていないが、探し続ける。いつか見つかるだろう」と。

ノアの箱船の模型がある。壁に張り付けられた説明によると、船は全長437フィート、幅72.92フィート、高さ43.75フィートであり、羊サイズの動物にして125,280匹の積載が可能であったという<sup>23)</sup>。そして箱船に載せきれなかった多くの生物が洪水で土中に埋められ化石となった、と創造研究所は説明している。

別の壁にはプラスティック・ケイスに展示されたカメムシ（悪臭を発する甲虫）がいる。捕食者に追われると、特殊な体腔のシステムを使って有害な化学物質を放つ。これは創造論者には進化によってつくられるには複雑すぎるらしい。「どうしてこのシステムが偶然にできるだろうか」と壁の説明が問い合わせる。答えは、この小さな甲虫は神が目的をもってすべての創造物をつくったことの証拠であり、進化論が致命的に間違っていることの証拠である、と<sup>24)</sup>。

副所長のジョン・モリスはフィンチでいっぱいのガラス・ケイジの前で新聞インタビューに答えた。「ダーウィンのフィンチを知っているか。彼に進化を確信させたフィンチのことだ。ここにいるのもダーウィンのフィンチだ……。それらはフィンチだ。今もただのフィンチだ！全然変わっていない。大きい嘴のもいれば、小さい嘴のもいる。だからフィンチで進化を説明でき

ないし、何をもってしても説明できない」と、進化論を否定した。

そしてホーニングについて聞かれると、自信あふれる言葉で次のように結んだ。

彼の動機はわからない。ただ現代の進化論を守りたかったのだろう……。しかしそんなものは、私に言わせれば、科学のテストに耐えられない劣った見解だ。創造論のほうがはるかにすぐれている。進化論が生き残るにはほかのものを排除するしかなかったのだ。彼らは学問的にそうしようとした。法廷でそうしようとした。しかし結局うまくいかなかったのだ。彼らに立ち向かおうではないか、真理は偽善より強い……。今回の判決で世界中のホーニングが縮みあがつただろう。それでも彼らは私たちを閉鎖するためになにか仕掛けてくるだろう。第一ラウンドは我々が勝った。しかし戦いはこれからだ。

### 注

- 1) 「州立サンフランシスコ大学ケニヨン事件——宗教教育と学問の自由——」、札幌大学紀要『札幌大学総合論叢』、第4号、1997年10月、pp. 33—58。
- 2) 「創造か進化か——アメリカの小さな町の教育論争、ヴィスタ教育委員会1992—94——」、札幌大学文化学部紀要『比較文化論叢』、第1号、1998年3月、pp. 117—174。
- 3) 「ビル・ホーニング——アメリカ'創造 vs 進化'論争における第2のスコープス?——」、札幌大学紀要『札幌大学総合論叢』、第5号、1998年3月、pp. 1—28。
- 4) しかし創造研究所のスタッフは科学者とはいえないという見方もある。カリフォルニア大学バークレイ校総合生物学部のケビン・パディアン助教授は1991年1月6日づけの『ロサンゼルス・タイムズ』で「彼らは客者であって科学者でない」述べている。彼は創造論運動と戦うためにつくられた進化論側の組織、全国科学教育センターの評議委員をつとめている。「彼らはレビューつきの学術誌に一度も投稿したことがない。ほとんど実験室に通ったことがない。ただ有名な科学者の文献を渉猟し、自分たちに都合の良い文章を抜き出すことしかしない……。創造研究所の教授陣は主流の非神学的大学から科学の学位をとっているかもしれないが、彼らがもつ資格証明書は世

間で通用するものではない」と。

- 5) 彼らのような創造科学者は生物進化論はキリスト教と同じく一つの宗教であるという前提に立っている。

地球の最初を目撃した人はいないから、宇宙の起源にかんする理論は創造論、進化論の両方とも証明されることはないので、その意味で共存可能である。したがって、進化論者も創造論者も科学者でありうるし、それぞれの世界観にしたがってデータを分析すればよいのである、と考えている。この論法をとると、地球の年齢はもちろんグランド・キャニオンの形成をはじめ何でも論争の対象になってしまう。彼らによれば、コロラド川が長い時間をかけてアリゾナの大地に1マイルの深さをもつ峡谷を刻んだのではなく、地球規模の大洪水が一瞬のうちにとてつもない渓谷を作りだした。同じように、ここ1万年以内に創造主が6日間で今日の姿と同じようにすべての種を作り出した信じている。ヒトは数百万年かけて動物から進化したのではない、という。副所長ジョン・モリスは新聞インタビューに答えて、「進化論的な考え方の多くは実証されていない。その指導者の多くは今はっきりと困っていると述べている。どちらが正しいか、時間が解決してくれるだろう」と述べている。

またハーバード大学の古生物学者スティーブン・J・グールドは「科学ではすでに解決済みの問題もある。たとえば地球の形や地球が太陽のまわりをまわっているかどうかという問題。彼らは過去の出来事は直接観察できないから証明できないというばかげた考え方をしている。進化がどのようにおこるかについては謎もあるが、おこったかどうかについては疑いの余地はない」と述べている（同じく、1991年1月6日づけの『ロサンゼルス・タイムズ』）。

- 6) 1992年当時で、授業料は1コース150ドル、3コースで合計450ドルである。
- 7) 州認可更新に反対票を投じた生物学者と地質学者が反対意見を文書で提出していた。この反対意見を述べた文書が公開されたとき、創造研究所の大学院プログラムを批判する投書が多数舞い込んだという。
- 8) この上申について、創造研究所大学院の院長ケネス・E・カミング博士は新聞インタビューに次のようにこたえた。この大学院では毎年平均22名の卒業生を送り出しているが、「我々の大学院が科学を教えていないというのは絶対まちがっている。私自身、ハーバード大学の博士号をもっているし、博士号をとるためにアメリカ全土の一流大学へ進学している卒業生もたくさんいる」と。さらにホーニッギーが委員の1人に反対投票を強制したのは公平ではないと前置きして、「ホーニッギーの決定には政治的な動機がある。もし州教育局への異議申し立てで解決されない場合には裁判に訴えるしかな

い。ホーニングの決定は我々の学問の自由の権利を侵害している」と述べた。

- 9) 同研究所は彼の考へで設立された。つまり、聖書の創造を科学的に証明する（あるいは擁護する）という発想は彼が最初に思いついたとされている。彼による創造についての科学的観察は1961年の著書『創世記の洪水』(John Wihtchomb & Henry M. Morris, *The Genesis Flood*, Presbyterian and Reformed Publishing Co.) なかで初めて示された。この本は創造科学運動として70年代後半から現在にかけて「創造vs進化」論争に大きな影響を与え、創造論思想史においてはまさにダーウィンの『種の起源』に相当するものとなった。彼は20世紀後半の最大の創造論者であるといえる。
- 10) ホーニングは190センチメートルの長身やせ形の男である。眼鏡をかけた大きな頭は卵というよりナツメヤシの形相にちかい。思いこんだら止まらない性格をもつこの大男は、1986年当時、週に75から8時間精力的に働いていた。疲れを知らないのか、趣味は気分転換をかねた週15マイルのジョギングだと、新聞インタビューに答えていた。
- 11) ホーニングは新聞・テレビのインタビューを受け、アンチ創造論者として確固たるイメージを確立していた。『ロサンゼルス・タイムズ』(89年12月9日づけ)では、「創造論が科学でないことは誰もが認めている。連邦最高裁は2年前、それは科学ではないと決定した。それを創造論と呼ぶのは勝手だが、それを物理学や地質学の学位ということはできない。科学ではなく宗教なのだ」と述べている。
- 12) 査察チームの報告書は創造論問題に触れることを避けながらも、創造科学の理論的問題をいくつかとりあげていた。たとえば、「地球の地質学的現状が創世記のノアの洪水によっておもに形成されたと考えられているが、洪水の水源は何か、どのように地上にあらわれたのか、そのあとどこへ消えたのか、などの質問に答えていない」と。また、学生にたいする「ガイダンスにも重大な疑問がある」と述べ、なかでも修士論文のテーマ選択に重大な問題があるとしている。生物学コースの大学院生が選んだテーマは「観察がヤング・アースという先入観に毒されている……。彼がたてる問題は70年も前に古生物学で議論され、解決されたものである」と。

しかしジョン・モリス副所長は「それが進化論者の言いぐさだ」と切り返す。「進化教の信者はそれが事実だという。私は創造が事実だと思っているが、証明はできない。ただし証明できないことを認めるだけの正直さをもっている」と。さらに、「報告書は反創造論的なカリフォルニア州公認宗教を造ろうとするホーニング一味の陰謀だ」とコメントし、もし州認可取り消しの決定があれば訴訟をおこす用意があることを明らかにした。

- 13) もちろんアイマーズを査察チームに指名したのは創造研究所である。
- 14) これにたいし、ホーニッグの特別補佐官ウィリアム・E・ルキーザーは「創造研究所の存続そのものを問題としていない。それを閉鎖しようとを考えている人などいない。しかし私たちは創造研究所の現行カリキュラムに修士号を授与するだけの資格があると法的には認められない……。もし彼らが創造論の修士号を授与するというなら、問題はない……。むしろ問題の本質は看板に偽りがないかどうかというもどである」と述べ、カリキュラムを「中古のフォードをシボレーの新車だと偽って売りつける」セールスマンにたとえた。
- 15) こうした創造研究所の告訴状にたいし、ホーニッグの特別補佐官ルキーザーは次のように反論した。「どの段階でも私たちの行動は法律に則っている。関連する法律はすべて守られている……。創造研究所は訴訟に使う時間とエネルギーをファカルティーとカリキュラムのレベルアップに使い、州認可の代わりに大学設置基準協会から認可をとったほうが得策なのに」と皮肉を述べている。確かに、設置基準協会からの認可がないから、州認可が必要なのだが。
- 16) ホーニッグ自身は私立高等教育機関評価委員会を別組織にすることを歓迎していたという。なぜなら、1990年度の教育予算はすでに3分の1にカットされていたので、仕事は少なければ少ないほどよいと考えていたからだ。負け惜しみが感じられないでもないが、「教育局の主な任務は幼稚園児から高校生を教育する公立学校の面倒をみることだ。現在、生徒は5百万人いる。これで手がいっぱいだ」と新聞インタビューに答えている。
- 17) 大学院プログラムの院長ケネス・E・カミングも新聞インタビューに答えて、「まったく安心できない。新しい機関は結局州教育局のスタッフによって運営されるだろう。彼らは進化教の信徒であり、ホーニッグはその狂信者だ」と述べている。
- 18) 創造研究所のこの責任論にたいし、州教育局のスタッフ、グレゴリー・J・ルセルは新聞インタビューに答え、「これまで一度もじっさいに学位付与を差し止められたことがないのに、学校の名声が傷ついたとすれば、責められるべきは学校自身の広報活動である」と述べている。
- 19) 新聞報道によると、サンディエゴのクリスチャン・ラジオ放送にはすでにホーニッグの決定について反対するリスナー参加番組までできていたという。
- 20) たとえば、メリーランド州のマルボロから来た電気技師ガーネット・スミス（当時、28歳）は博物館のオープンを聞いて、はるばるやってきた。「これはすごい……。息のむような展示だ。バイブルのいろいろな概念がすべて並べてある。だから、世界の

あらゆる時代をフォローできる……。精神のあらゆる次元でバイブルを開いてくれる」と感想を述べている（1992年9月21日づけの『ロサンジェルス・タイムズ』）。

- 21) 宇宙に関するほの暗いセクションでは、銀河や彗星の活動が宇宙の歴史は一万年以下であると主張されている。またビッグ・バン理論と宇宙が始まり他の概念を否定することを、博物館のツアー・ガイドが求めている。「ビッグ・バンはすたれかけている……。多くの天文学者はビッグ・バン理論をあきらめつつある。彼らはたまごを全部バスケットに入れたが、証拠がフィットしない。だから、すたれかけている。彼らは次に何を思いつくだろうか」とジョン・モリスは述べている。
- 22) 博物館の最後の廊下を通ると、ヒーローの系譜とサタンの系譜が両側の壁に示されている。ヒーロー（創造論者）の系譜として「過去の聖書を信じた科学者」、サタンの系譜ととして悪人たち（進化論者）が写真と短い伝記で説明されている。「悪人」グループにはジョン・D・ロックフェラー、フリードリッヒ・ニーチェ、カール・マルクス、そしてチャールズ・ダーウィンが含まれている。「レイシズム、進化論のルーツ」と書かれた項目を読むと、「ダーウィンやジュリアン・ハックスレイ、ほとんどの進化論者はアドルフ・ヒットラーがレイシズムという悪名をはせる以前からレイリストだった」と書かれている。もちろんヒットラーはサタンの系譜に含まれる。
- 23) カリフォルニア州立大学バークレイ校総合生物学部助教授パディアンは次のように批判する。もし箱船がかつて存在したすべての動物を一対ずつ載せたとしたら、創造論者がいうよりはるかに大きくなくてはならない。象のような大きな場所をとる生物もいたはずだ。その餌の場所も必要だ。肉食動物はどうか。もしノアがそれぞれの動物の一対だけを載せたのなら、ライオンやトラに餌をやるためにどちらを犠牲にしたのか、と。「それらはたくさんの種をほろぼしたにちがいない」と。  
ヒトの尾骨の「効用」についての創造論者の説明も「ばかげている」とパディアンはいう。もし尾骨にそんな大きな機能があるなら、私はヘンリー・モリスが木の枝にぶら下がるのを見たいものだ、と。「私たちに尾骨がするのはもちろん私たちが尾をもつ他の動物から由来しているからだ」と。（展示では、尾骨は「体をささえる筋肉や内臓の安定にとって」重要な付属物であると主張されている）。
- 24) カリフォルニア州立大学バークレイ校総合生物学部助教授パディアンはこの展示は他の多くの創造論の「証拠」と同じように関連する事実を忘れていると指摘する。じっさい、カメムシは奇妙な、しかし生物学的にロジカルな昆虫の長い系統の一部として進化した。「彼らはこの動物を見て、あらゆる法則にもかかわらずこうなったという。だから——ここに大きな飛躍がある——このように創造されたにちがいない」という」

と。そのような推論は一般人が科学にうといことを逆手にとったものだと嘆く。「たとえ一般人にもっと教養があるとしても、彼らはあいかわらず自分たちの信念を述べ、科学的発見を無視するだろう……。」

### 参考文献

- Eve, Raymond A & Francis B Harrold, *The Creationist Movement in Modern America*, Boston : Twayne Publishers, 1991.
- Holton, Gerald, *Science and Anti-Science*, Cambridge : Harvard University Press, 1993.
- Hughes, Liz Rank, ed, *Reviews of Creationist Books*, second edition (First edition edited by Stan Weinberg with the assistance of Paul Joslin), Berkeley: The National Center of Science Education, Inc, 1992.
- Johnson, Phillip E, *Darwin on Trial*, second edition, Downers Grove : Inter Varsity Press, 1993.
- Larson, Edward J, *Trial and Error : The American Controversy over Creation and Evolution*, Oxford : Oxford University Press, 1985.
- Summer for the Gods : The Scopes Trial and America's Continuing Debate over Science and Religion*, New York : Basic Books, 1997.
- Menton, David N., PhD, "Inherit the Wind : A Historical Analysis," a research paper of Missouri Association for Creation (405 N. Sappington Rd. Glendale, MO 63122), 1994.
- Morris, Henry M, *The Long War against God : The history and Impact of the Creation/Evolution Conflict*, second edition, Grand Rapids : Baker Book House, 1990.
- History of Modern Creationism*, San Diego : Master Book Publishers, 1984.
- Numbers, Ronald L, *The Creationists : The Evolution of Scientific Creationism*, New York : Knopf, 1992.
- Toumey, Christopher P, *God's Own Scientists : Creationists in a Secular World*, New Brunswick : Rutgers University Press, 1994.
- Webb, George E, *The Evolution Controversy in America*, Lexington : the University of Kentucky Press, 1994.
- Wilson, David B, ed, *Did the Devil Make Darwin Do It? Modern Perspectives on the*

*Creation-Evolution Controversy*, Ames : Iowa State University Press, 1983.

***Los Angeles Times*** (日付順)

- Looy, Mark E, "Letter to the Editor : Evolutionary 'Wind,'" 26 March 1988, p. Calendar 2.
- Granberry, Michael, "Honig Seeks to Bar 'Creationist' Master's of Science Degrees," 9 December 1988, p.One 40.
- Gordon, Larry, "Compromise by Creationist School Keeps Degrees Valid," 19 January 1989, p.Metro 1.
- "School Won't Mix Science with Bible," 20 January 1989, p.One34.
- Greenwald, Igor, "School Says School Is Trying to Shut It for Teaching Creationism," 1 September 1989, P.Metro 1.
- Dart, John, "'Creation Science'—an Elusive Theory," 4 November 1989, p. Metro6.
- Dickerson, Richard E, "Letter to the Editor : Creationism and Evolution," 8 November 1989, p. Metro 6.
- Trombley, William, "State May Decertify 'Creationist' School," 17 January 1990, p. Metro 1.
- "Withdraw License of Creation Science School, Panel Urges," 18 January 1990, p. Metero 3.
- Wallace, Amy, "Creationists Sue for Right to Give Master's Degree," 14 April 1990, p. Metro 1.
- "State Restores License of Creationist School," 16 November 1990, p. Metro 3.
- "Degrees without Darwin," 6 January 1991, p. Metro 1.
- "Is It Science or Theology? Panel Thrust into Bitter Debate," 12 January 1991, p. Calendar 16.
- "Creation Science School Loses Round in Suit Against State Officials," 20 February 1991, p. Metro 1.
- "Way Cleared for Christian School's Suit against Honig," 14 March 1991, p.Metro 3.
- Julie Tamaki, "State to Settle Suit with Christian School," 5 February 1992, p.Metro 4.

***San Francisco Chronicle*** (日付順)

Associated Press, "State Bars Church School's Science Degree," 8 December 1988, p. A10.

Associated Press, "School Claims Victory in 'Creationism' Battle," 6 February 1992, p. A20.

鵜浦 裕 「創造論の洪水におぼれるか、進化論」、東京大学出版会、『UP』、第239号、1992年9月、pp. 1-5。

「州立サンフランシスコ大学ケニヨン事件——宗教教育と学問の自由——」、札幌大學紀要『札幌大学総合論叢』、第4号、1997年10月、pp. 33-58。

「創造か進化か——アメリカの小さな町の教育論争、ヴィスタ教育委員会1992-94——」、札幌大学文化学部紀要『比較文化論叢』、第1号、1998年3月、pp. 117-174。

「ビル・ホーニッグ——アメリカ '創造 vs 進化' 論争における第2のスコープス? ——」、札幌大学紀要『札幌大学総合論叢』、第5号、1998年3月、pp. 1-28。

「アメリカの創造論運動小史——1920年代~1980年代——」、札幌大学文化学部紀要『比較文化論叢』、第2号、1998年6月、ページ未定(印刷中)。

(サクラメント現地調査のさいノーマ&ボブ・ハウ夫妻の協力を得た。また資料収集にさいしては札幌大学図書館から有益な助言と協力を得た。ハウ夫妻と札大図書館スタッフのご指導に感謝申しあげる。)